

歴史問題 向き合い考える

広島・中国人強制労働和解10年

戦時中に広島で強制労働させられた中国人と、雇用主だった企業の間で歴史的な「和解」が成立してから今年で10年。節目を機に、歴史問題の解決を考える集会在19、20日に開かれる。主催者は「加害の歴史を継承し、日中友好が深まるきっかけになれば」という。

19日 中区で記念集会

広島市中心部から車で約1時間。太田川上流、西中国山地の山間に立つ「安野中国人受難之碑」の高さは360センチだ。太平洋戦争末期、この地で水力発電所建設工事の過酷な労働に従事させられた中国人の数が360人。その全員の名をびっしり刻んだ両側の碑の土台は高さ29センチ。生きて母国に帰れなかった仲間の数に

元労働者と遺族計5人が西松建設に損害賠償を求め、雇い主だった西松建設(旧西松組)側との間で長く交渉や裁判を続けてきた。

元労働者と遺族計5人が西松建設に損害賠償を求め、雇い主だった西松建設(旧西松組)側との間で長く交渉や裁判を続けてきた。

「元労働者の碑が継承」

年の日中共同声明で決着済みだとして原告の訴えを棄却する一方、強制連行と強制労働の事実を認定し、同社に対し「被害の救済に向けた努力をすることが期待される」と付言した。



和解手続き後の会見で、西松建設側の弁護士(右)と握手する中国人元労働者の邵義誠(シャオ・イ・チェン)さん。2009年10月23日、東京・霞が関

安野発電所と中国人強制労働

太平洋戦争末期、労働力不足を訴える産業界の要望を受け、日本政府は閣議決定などを経て中国人労働者の「移入」に着手した。各地の鉱山や港などで4万人近くの中国人が重労働に就かされた。西松建設は安野村(現・安芸太田町)の安野発電所建設のため、厚生省(当時)に中国人労働者の移入を申請。計360人が強制的に連行されるなどして1944年7月、中国・青島を出発した。労働者たちは劣悪な環境の中、昼夜2交代で導水トンネル工事などに従事。広島刑務所に収監され被爆死した5人を含む計29人が死亡した。



2010年に建立された「安野中国人受難之碑」。左後方には中国電力安野発電所。いずれも安芸太田町坪野の「受難之碑」に刻まれた名前を見て悲しむ遺族たち。2012年5月、「広島安野・中国人被害者を追悼し歴史事実を継承する会」提供

動かされた360人全員を対象に補償することや、元労働者らが強制連行で受難した事実を同社が認め、謝罪する文言を盛り込んだ。元労働者や遺族らが現地を訪れる訪日活動も続けられてきた。碑は、和解1年を記念し、両者連名で建立。「歴史を心に刻み、日中両国の子々孫々の友好を願って」。背面にそんな碑文を刻む。

基金を運営する委員会は解散したが、訴訟の支援団体を母体に10年に発足した「広島安野・中国人被害者を追悼し歴史事実を継承する会」(事務局・広島市)が和解の精神を引き継いで活動する。

訴訟で原告団長を務め、和解の場で元労働者を代表して西松側の代理人と握手を交わすなど、中心的存在だった邵義誠さんは昨年6月に亡くなった。「継承する会」によると、9年前

(宮崎園子)